

# 学校だよい

## 第7号

令和4年9月30日発行  
向日市立第4向陽小学校  
TEL 933-3388  
FAX 933-0444

学校教育目標  
やさしく かしく たくましく



## 開かれた窓



廣川 伸一

日中はまだ夏のような暑さが続きますが、朝晩はめっきり涼しくなってきました。秋の夜長、灯火親しむ候となりました。多様な夜の過ごし方がある現代ですが、心静かに本をひもとくのがやはり秋の夜にはふさわしいように思います。私は最近はおっぱら図書館で本を借りて読んでいます。インターネットサービスで予約したり取り寄せたりした本を自宅近くの図書館に取りに行くのが週末のルーティーンになっています。本の受け取りは数分で終わります。ついでに雑誌や一部のコーナーを回っても10分ほど。いつしか私にとって図書館は長時間滞在する場所ではなくなりました。

その理由として考えられるのは、図書館にいると心がどういふわけかそわそわし、大げさに言うと絶望的な気持ちになることです。読書好きの私にとって、興味を引く書物で満ちた図書館は心躍る場所であったはずなのですが、いつの頃からか不安な気持ちにさせる場所になってしまいました。そのため無意識のうちに図書館滞在時間が短くなってきたようです。なぜそんな気持ちになるのか？その答えは自分でも分かります。一生かかっても読み切れないほど多くの本がそこにあるからです。冷静に考えれば当たり前のことなのですが、欲張りな私は、それが悔しく感じられ、ときおり図書館の本棚の前で切ない気持ちになるのです。

こんな感情を解消するヒントになりそうな言葉に先日出会いました。それは、山奥にある人文系私設図書館ルチャ・リブロの司書青木海青子さんの言葉で、新聞のインタビュー記事に載っていたものです。

**ルチャ・リブロの書架には3千冊を超える本を並べていますが、私が一生かかっても全部は読めません。だからこそ「自分の知らない世界がこんなにも広がっているんだ」と知ることができます。\***<sup>※1</sup>

生涯一度も手に取ることのない本たちが世界の広さを私に知らせてくれる、図書館の存在意義がそんなところにあるとは今まで思いもしませんでした。そう考えると、書架の前で感じる切なさを謙虚に受け止められそうです。

青木さんは図書館にある一冊一冊の本は「窓」だとも言います。「窓」の向こうに広がっているのは「まだ見ぬ世界の風景」。「もしあなたが今いる状況をしんどいと感じているなら、ぜひ心に窓を持ってみてほしいです。すぐに窓枠に足をかけて乗り越えることはできないでしょう。でも別の風景を目にすることで、前を向けるかもしれない。未来が少し楽しみになるかもしれない。」<sup>※2</sup>

子ども時代に自ら新しい世界に踏み出すことはないかもしれませんが、でも、本という「窓」を通じて世界を知ることができます。子ども時代にたくさんの本に触れ、世界の広さを知ってほしいと願います。それは、自分が将来に向かってどう生きていくかを考える大きなきっかけになると思います。図書館には無数の「窓」が並んでいます。秋の一日ご家族で図書館に出かけてみてはいかがでしょうか。

※1 「山村に夫婦で開く図書館 学校苦手だった妻が語る『本は窓』の意味」朝日新聞デジタル 2022.9.4

※2 「本が語ること、語らせること」青木海青子 夕書房





